

佑啓

ゆ う け い

発行 者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集 者 広報委員会

今も昔も、昔も今も

：そして未来も

行場 貴子

残暑もようやく先が見えてきました。空の色や肌にふれる風に少しずつ秋の気配を感じられるようになりました。

今夏はオリンピック・パラリンピックの年。開催都市のリオデジヤネイロから連日、日本選手の活躍が伝えられ、一喜一憂、大いに盛り上がりました。作業所の皆さんも話題は専らオリンピックで、朝礼時には『○○選手が金メダルを取ったよ』『××競技が今日決勝だよ』などあちこちから聞かれました。普段は自分から発言することの少ない方からも、スポーツ解説者さんからの状況報告に驚いた程でした。

明るいニュースは、人や社会、みんなを元気にしてくれます。今回のオリンピックで実感いたしました。選手の活躍はもちろんですが、競技後のインタビューの受け答えはその人柄がにじみ出て、努力をした人ならではのひと言ひと言には重みがあり、競技以上に感動致しました。クーベルタンが提唱した「オリンピック競技会で重要なことは、勝つことではなく参

加することである。」は有名ですが、子どもの頃にこの言葉が流行し、試合に負けたり、テストの成績が悪いと「参加することに意義があるんだからいいんだよ」などとウソぶき、先生や親を嘆かせたものでした。

この言葉には更に続きがあり、「人生において重要なことは成功することではなく、努力することである。本質的なことは、勝ったかどうかではなく、良く戦ったかにある」ということである。要は、弱くとも参加すればいいではなく、全力で戦うことが重要だと強調しています。このことを知ったのはかなり後になってからで大人になった私は改めて高潔なオリンピック精神を学んだ次第です。

文京区とご縁があつて大塚・小石川両福祉作業所を当法人佑啓会が運営させて頂き、九十年が経ち今年十一年目を迎えました。楽しい時間はあつたという間に感じるものですが、本当に「あつた」という間の十年だったと思います。利用者・保護者の皆様に温かく迎え入れて頂き、文京区障害福祉課はじめ、区内の事業所、関係機関の皆様を支えられ、おかげ様で大過なく過ごすことが出来ました。

文京区が東京のどの辺りに位置するかも正確に理解しておらず、野球やコンサート観戦など非日常の特別な場所であつた後樂園が勤務地として日常の場所になつていくことを、毎日東京ドームを眺めるながら十年経った今でも不思議な感覚に陥ります。働き始めた頃は、数分間隔で運行される地下鉄に驚き、朝、晩の通勤時は一〇二分待てば次の列車が到着する地下鉄に走りこむ都会の通勤者のせわしなさに驚愕しました。が、ひと月も経たないうちに地下鉄のエスカレーターを駆け上がる自分に気が付き思わず苦笑いしてしまいました。小学生の頃、遠足で行った懐かしいの上野動物園、六義園、後樂園は、利用者さんのクラブ活動で繰り返し返し訪れ、時間があまりない時は、東京大学構内の散策をする等、十年前では想像だに出来なかったことです。今では、テレビや新聞などで文京区という言葉を見聞きすると関心がいき、神経が集中します。これは、私の中で文京区は「地元」という感覚になつており、人間の帰属意識で自然にわき起こる心持だと思えます。家庭、市区町村、都道府県、国・・・と小ささまざまな規模の社会に私達は帰

属しています。自分が生き、生かされている社会を大切に思う気持ち、愛着をこれからも大事にしていきたいと思えます。

十年間を振り返り、胸に刻んでいる事があります。平成二十三年三月七日の出来事です。毎年年度終盤に観劇会、食事会などグループ外出を実施しております。その観劇会の帰路、利用者さんのひとりを見失ってしまいました。地下鉄の最後の乗り換え時に見失い、すぐに構内を捜しましたが見つからず、大捜索となりました。ただただ無事を祈り捜索を続けた一昼夜。不明のまま迎えた翌日、いつもの様に利用者さんが通所してきます。事情を知らない利用者さんがほとんどでしたので、動揺を与えないよう出来るだけいつもと変わらない態度をとろうと必死に平静を装いながら、通常業務に当たりました。そのような中で『喉が痛いからアメを下さい』『爪が伸びているから切って下さい』など、いつもと何も変わらない利用者さんの態度に喉アメを渡し、爪を切りながら、こらえていた涙が溢れました。その日の夕刻、遠く離れた市川市で善意ある人の通報によって無事に見つけることができました。その時全てに感謝すると同時に、我々の仕事は利用者さんの命をお預かりしている仕事だと改めて肝に命じました。そして当たり前に夜が来て朝を迎えられる、普通の生活がいかに尊いものであるかを、胸が押しつぶされそうに一昼夜を過ごし、痛感しました。この時の思いは、今でも自分自身の戒めとして心にとめております。

その四日後の三月十一日。東日本大震災が起り、日常生活を送ることの有難さを再度深く思いました。



佑啓会では今年度職員の研修に特に力を入れています。法人内外の講師による講演会や新人職員研修はもとより、中堅職員、専門員に至る、全職員を対象にできるだけでなくの人の参加してもらえ、様各エリア毎に実施をしています。法人の理念や接遇、虐待防止研修などは繰り返し行うことでようやく浸透していくものだと思います。その他、記録やデータなど一括管理し、膨大な事務仕事が出来るだけスムーズに行える様、システム導入の研修も適宜実施しております。現在人材確保などとても厳しい状況にある福祉施設ですが、こうした研修を通して職員一人ひとりが力をつけ、働き甲斐を見出し、更には福祉の仕事の楽しさや魅力を外へ向けて発信していくことが出来ればと願っています。

人は、自分が知らないこと、理解できないことに対しては消極的排他的になります。「恐れることはない、理解すればいいのだ」と言ったのは物理学者キュリー夫人ですが、様々なものが氾濫し、インターネットなどの普及により沢山の情報が得られる現代でも正しい理解に繋がっているのではありません。時代に共に社会は大きく変化を遂げていますが、人と人とのコミュニケーションは希薄になつて

いるように思います。気軽に何でも手に入るものが、反対に個々の壁を厚くし、他人に対する無関心へと繋がっている様に思います。時代は変わっても、人は目でものを言い、肌で感じ、心で動きます。技術や科学の進歩は生活を快適にする為のもので、人間を退化させるものであつてはいけません。人を思うことで、自分も癒される、他者を認めたり、許すことで自身も救われる・・・そんな本来持つて

いる人としての感性、失われつつある感覚を呼び起こしたいものです。

十年という一区切りを迎え、新たな一年を進み出しました。今まで支え、協力して頂いた皆様には感謝をしながら、作業所自治会の名称の通り、これから一歩いっば着々と歩んでまいりたいと思います。そしてまた十年後「あつた」という間「だったな」と思える様にかけがえのない日々を利用者さんと共に築いてまいりたいと思います。

2020年東京五輪・パラリンピック。朝礼時、利用者さんの歓声が沸き起こります。『白井選手が金メダル取ったよー』・・・。

(ふる里学舎 小石川 施設長)



東京大学の学生さんの十三名のゼミ合宿がふる里学舎千倉にて一泊二日で行われ、利用児童、職員との交流の場ともなりました。寄せていただいた感想文の一部を掲載させていただきます。

ふる里学舎を訪ねて

千葉県と一口にいうものの、この県の風景は多様だ。京葉線の舞浜駅を過ぎるともう見慣れない風景になる。浦安から幕張にみられる、人間の生活の進歩を体現するかのようなベッドタウン、それを越えると日本の発展を陰ながら支えてきた京葉工業地帯の風景が車窓を通り抜ける。そこには人間の力強さが湧き出るように感じられる。ところが蘇我を過ぎたあたりからみられる風景では人間は風景の一部に過ぎなくなる。そう、そこには畑、青空、さらに行くと海。自然が巨大な姿を現すのだ。人間が強調される風景から少し離れ、空と海と森に囲まれた所、時間軸も空間軸も普段とはどこか異なる南房総の一角に、ふる里学舎はあった。

「障害者施設」という言葉から醸し出されるものは明るいとは言えない。しかしそういつた決して明るいとは言えない施設に、我々大学生を歓迎し、宿泊させるというくらいだから、何かしらの自信と、その自信の根拠となる事実があるのだらうと思っていた私は、疑い半分、期待半分の気持ちで施設を見学していた。

施設の清潔さは完璧といったいほどであった。好感を持てる、広々とした個室や、開放感があり

窓からはよい眺めを一望できる大広間。光の差す食堂。そして外には南房総ならではの広大な敷地。活動してよし、栄養補給してよし、休息してよし。あまりのクオリティーに面食らってしまったことは事実だが、自分では少しひねくれているのかも知れない、そんな完璧さが少し怖く、そしてまた少し空々しく感じられた。私は素直に感動し、驚くと同時に何とも言えない空虚な気持ちになっていた。

そんな気持ちに変化が起きたのは宴会の席であった。そこにあったのは「ふる里学舎」という血の通った共同体だった。施設職員の方々の温かい子供へのまなざし。偽ることのできない子供の屈託のない笑顔。職員の名前はもちろん、細やかなところまで気を配る理事長。職員の方々は自己紹介だというのに理事長と自分の関係について話し出すという事実。僕は席にいて、「家族」という言葉が持つ意味の幅が、拡張されていくのを感じた。ここは施設利用者、利用者家族、職員、職員家族、理事長すべてを包み込んだ家族なのだ。人と人のつながりという、現代社会が過去に置き忘れてしまったような大切なものが力強く、そして積極的な意味で輝いている共同体だった。

たつた一泊しに来た大学生が大きな人の輪を知り、それに溶け込める場所。溶け込めば溶け込めるほど人と人の血の通ったつながりというものの価値を再認識できる場所。人として生きることに際する根本的な価値に帰っていく。そんな「ふる里」がそこにはある。

(教養学部三年 氣駕 知明)



ふる里学舎の方々はみなさん障害と社会について本気で考えをめぐらしていました。これは一見小さな問題に見えて実は社会の便宜的な線引きや不幸といった人間的な本質を映し出しているのかもしれない。今障害者を社会的に受け入れないこととうまくいっていることは何なのか。少しでも多くの人が生きやすい世の中はどんな世の中なのか。障害者が生きやすい世の中は今度は誰かが生きにくい世の中になるかもしれない。とてもデリケートな問題です。そうしたことをごに考え示唆を与えてくださったこと、とても感謝しています。私たちを迎えてくださり本当にありがとうございます。

(教養学部二年 山田 梨紗)



地域と共に歩む作業所

金島 清次

息子・広史が2009年より文京区立小石川作業所に入所して今年で八年目になります。就労継続支援B型のサービス利用者ですが、支援員さんの努力にもかかわらず、なかなか作業には取り組めていないように皆さんを手こずらせています。

息子はダウン症で話すことはできないのですが、言われたことは概ね理解しているとは思っています。こちらの指示通りに動いてくれるかどうかは別問題です。ですから、作業所では本人が納得してやれるような作業を選んで指導していただいているようです。

小さいころは熱を出したり肺炎で入院などありましたが、最近では年に数回の風邪くらいで今のところは元気です。作業所が楽しいかどうかは本人が話せないのですが、嫌いではないようで毎朝元氣よく作業所の少し手前まではたどり着きます。作業所に入るには支援員の方々の助けをいただながら登所しています。

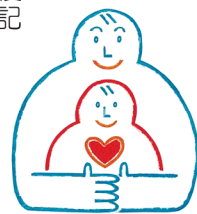


(小石川作業所保護者)

保護者連絡会がほぼ毎月ありますが、当初共働きのためこの定例会には妻と分担して参加していました。(今は妻が参加していますが)また、作業所が参加している区のイベントへの出店や利用者の「祭り」の手伝いなど、親の参加も単にお手伝いではなく親も一緒に楽しもうという気持ちで参加しています。

一大行事に「一歩いっぽ祭り」というのが秋にあります。利用者・保護者でバザー・飲食コーナーを中心に佑啓会さんのパンやジャム等好評で販売されます。町会・区役所の方など大勢の地域の方にも来ていただいています。私は受付けやコーヒーカーナーなどを担当しましたが、バザーの売り場を担当も楽しそうに参加したいなとひそかに思っています。

編集後記



日本が合計四十一個のメダルを獲得したリオオリンピック。無事に閉会となりましたが、まだまだあの感動と興奮が冷めやらぬ日々を過ごしております。九月七日から開催されるパラリンピックや四年後の東京オリンピック・パラリンピックでも今回以上の感動と興奮を味わいたいと思います。初秋の候とご挨拶することが果たして正しいのか・・・と言うほど、まだまだ暑い日が続いていますが、熱気のコもった佑啓九十七号を皆様へお届けいたします。

内田 京介